

波の音

—— こどものころ ——

遠藤めぐみ

静かな朝に、じっと耳を澄ませていると、どこかあまり遠くない海から、暖かく湿っぽい潮風が吹いてくるように思う時がある。太平洋から阿武隈山地の方へ吹き抜けていく風の香りをかぐと、ほのかに甘く塩辛い味が口に広がる。

東京の都心に住んでいて、こども時代を過ごした海辺の町で、そっと肌に触れた黒潮のにおいを岸壁に砕け散る波の音と共に思い出すのは、人と

車の流れがふとやむ休日、それも早朝のことが多い。

踏切を渡ると、海までの道がある。国道を渡って海へと下りる小道は、いまでは封鎖されている。というのは、二十世紀末の数十年間で、あれほどあった砂浜が、浸食の果てに消えてしまったから。私がこどものころには、まだ海草の打ち上げられた砂浜は残っていて、太平洋に屹立する断

崖絶壁を掘つてつくられた獣道のような石段をうねうねと下りてゆく。砂浜に立つと、いま下りてきた陸地が見える。何キロメートルも続く海岸線だ。その上に日本列島がある。

目の前に広がるのは果てしない海だ。遮るものの何もない大海原をじっと見ていると、空だ。空と水の間に水平線があつて、どこまでも続く。空は、私の頭の上にもあるのだけれど、その同じ空が、海の方こうのはるか遠い向こうにもあるという。そこには別な陸地があつて、砂浜がある。その砂浜にじっと目を凝らして、こつちを見ている人がいるのだろうか。

海、水平線、空。海、水平線、空。突然、豆粒ほどの船が水平線の向こうから現れる。はじめは点にしか見えなかった船が、しだいにマッチ箱ほどの大きさになる。とてもゆっくり、でも確かに、港めざして近づいてくる。断崖の上には、船

に位置を知らせる灯台がある。

ポオオー。

大型タンカーの鳴らした汽笛が、響き渡る。

水平線の向こうに海とつながった陸地があつて、船はこつちの陸地とあつちの陸地を行ったり来たりしている。そんなことが、こどもには不思議でならない。大海原に向かつて、私は目を凝らす。マッチ箱ほどに見えた船が芥子粒ほどになり、水平線の向こう側にツルツと消えるところをこの目で確かめようと。波は繰り返して地球のリズムを刻む。

これでも私は幼稚園に通わせてもらったのだ。歩いて行ける距離に、ふたつの幼稚園があつた。ひとつは小学校の近くにあつた。そろいの帽子をかぶったこどもたちは、灰色がかつた青のスモックの制服に、ビニール製の黄色いかばんをさ

げている。時間割があつて、文字だの数だのを教えているという噂だった。

もうひとつは海の方にあつた。その幼稚園に私は二年間通つた。制服もなく、決まりごともしなく、わりとゆつくり遊ばせてくれる。お茶の水の保育を出た先生もいた。

三月二十三日に生まれた私は、四月生まれのこどもに比べて、何事も遅れていた。ひ弱で泣いてばかりいることも、海の方にある幼稚園なら、何とかやつていけるかもしれない。母も考えたのだろう。ませたチャキチャキの知恵のあるこどもたちに交じつたら、神経質でとろい意気地なしは、はじき出されてしまうに決まっている。口がまわらず足ものろい私は、いつも泣いてばかりいた。晴れの大会では、スタートラインからゴールに背を向けて、みんなと逆方向へ駆けだしてしまつたほどだ。

昭和三十七年、私は茨城県日立市に生まれた。

銅山の廃業した後、工業のほかに頼るものない人口二十万人ほどの小さな田舎町だ。海岸線に沿つて灰色の大きな箱のような工場がポツリポツリと建ち並び、周辺に工場で働く従業員たちの社宅がマツチ箱のような集落をつくつていた。

ちようどそのころ、こどもたちの身に恐ろしいことが起こつていた。ポリオ、森永ヒ素ミルク、サリドマイド、小児ぜんそく、水俣病。後に薬害や公害としてマスコミに登場し、何十年も法廷で争われ、揚げ句の果てに忘れ去られていった苦しみは、私の世代のひいた籤くじだった。私の親の世代は、戦争でダメージを受けた。戦禍を生き延びたこどもたちが大人になって、私たちを産んだ。

生まれて初めての幼稚園で、幾日たつても私は泣きやまなかつた。お友達はみんなお母さんと別

れて平気なのに、お見送りに園まで付いてきた母が幼稚園にひとり私を置いて帰ろうとするのを私はこらえることができなかった。母親が園まで付いてくるのはかなり過保護で、たいいのお友達は隣近所のこどもと誘い合わせて歩いてくる。家が遠いこどもたちは日立電鉄のバスに乗って定期をかざし、勇ましくステップを下りてくる。私といえは園まで歩いて通える上に、途中で祖父母の家があつて、おじいちゃんおばあちゃんの顔を見に寄り道できるというお楽しみがあるにもかかわらず駄目なのだ。お帰りの時間には必ず母が迎えにくるというのに、ビエイビエイと泣き続けた。もうひとり、よく泣く加奈子ちゃんという子がいて、ふたりは「泣きメグ」と「ガナコ」と呼ばれた。

厳かな朝の祈りに始まる園の生活が、耳をつんざくような泣き声に乱される。ビエイビエイ、ガアガア。「天にまします我等の父よ、願わくは、

」。ビエイビエイ、ガアガアガア。泣きメグとガナコが二重唱を始めてしまう。エプロンをかけた先生がどれほどすつとび歩いて、泣いている当人は何を泣いているのかわからず、それが悲しくて余計涙があふれ出る。しゃくりあげて泣きやむと、ついさっきまで泣いたことが嘘のようだ。

「そんなに泣いたら目がこぼれ落ちる」とか「あんまり泣くと出ペソになる」とか「泣くのをやめないと人さらいが山に連れていく」とかの脅し文句は、私をさらなる恐怖に突き落とした。涙に濡れた薄暗いまぶたの奥にくっきりと、その恐ろしい情景が思い浮かび、今度はあまりにリアルな自分の想像に怯えて泣いてしまう。

私たちは紙芝居が大好きだった。お帰りの時間が近づいて「さようなら」のあいさつをする前に、お話を讀んでもらう。絵本や紙芝居を手にし

た先生を囲んで輪になって座る。

「きょうは、なんのおはなしにしようか」

かちかち山、やまたのおろち、三びきのこぶた、あかずきん、七ひきのこやぎ、マツチ売りの少女、みにくいあひるのこ、かぐやひめ、…。繰り返し読んでもらう作品はだいたい決まっています、何度もやる。

とりわけのお気に入りには『おおきなかぶ』だった。このロシア民話の絵本（A・トルストイ再話、内田莉莎子訳、佐藤忠良画、福音館書店）は一九六二年に出版され、いまなおロングセラーとなっている。おそらく紙芝居も出ていて、幼稚園で見たのは大きなボール紙に多色刷りで印刷された紙芝居のほうだったと記憶する。こどもたちは絵だけを見て、裏に書かれた文字を先生が読んで聞かせる。気に入った作品は何度もやるので、筋もせりふも覚えてしまっている。それで掛け声を

かけるのが楽しい。

「うんとこしょ

どっこいしょ」

「うんとこしょ

どっこいしょ」

かぶをぬこうと集

まってくる数が増え

るにつれて、掛け声

にも熱が入る。次に

何ができるかわかっているながら息を詰める。手に汗

握って、力がこもる。

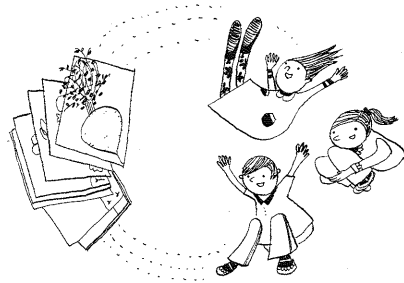
「やっと、かぶはぬけました」

掛け声を絶叫していたこどもたちも勢いあまっ

て、後ろにでんぐり返す。

幼稚園へ向かう小道は舗装されていなかった。

私たちは雑草の生い茂る土手沿いに、土を踏んで



歩いた。

その土手で、春になるとおばあちゃんがヨモギを摘んだ。ツクシ、タンポポ、オオイヌノフグリ、シロツメクサ、笹の葉。おじいちゃんは私の手を引いて、草に名前があることを教えた。笹の葉で船を作り、笹笛を吹いて聞かせた。

雨が降ると、自転車やオートバイの通った轍ができる。そこに雨水がたまって水たまりになる。やわらかくゆるんだぬかるみにカラスやイヌの足跡がついていた。

雨の次の日、朝から晴れたお日様が土の地面を乾かすと、喜び勇んで外に出た。いい具合の泥んこで、お団子を作る。あちこちに水たまりができて、どこからかアメンボがやって来る。

ツイツイ ツイツイ

アメンボは細い胴体から伸びた長い足をリズムカルに伸び縮みさせる。か細い足の先端から同心

円状に水紋が広がり、それがアメンボとともに動いていくのがおもしろくて、じっとしゃがみ込んで見入っている。その姿はおしっこを漏らしている姿に似ているので、先生からあらぬ嫌疑をかけられる。

水たまりを華麗に進むその虫をミズスマシと言うこどももいて、アメンボなのかミズスマシなのか、決着のつかない言い合いになる。アメンボなのかミズスマシなのか。わからなくなって私はまた泣く。

おうちで夜寝る前に読んでもらう絵本は、幼稚園で輪になって見る紙芝居とは、また別のお楽しみだった。目を閉じてベッドの中で母の読む絵本に耳を澄ませる時、私は一切本を見なかった。絵も見なかった、目をつぶっていたのだから。母は私が眠りにつくまで本を読む。そして、うとうと

し始めると静かに電気を消して消える。

幼稚園では字を教えなかつたし、家でも字を教えてもらうことはなかつたので、小学校に上がるまで私は自分の名前の読み書きすらできなかつた。それで、たいして困りもしなかつた。にもかかわらず、私はたくさんのお話を知っていた。好きな絵本は繰り返し読んでもらうので、しまいに暗記していた。

田舎町の本屋にこども向けの絵本の在庫はなく、私に与えられたのは市立図書館から借りてくる絵本だった。毎週日曜日、借りられるだけ借りてきては、毎晩読んでもらう。その中に気に入った絵本があると、もう一週間借りる。それでもまだ執着してようやく、「買ってあげようか」となる。田舎の小さな本屋から東京の出版社に注文を出すので、届くのには二、三週間かかる。きょうとあしたもわからない私にとって、それは果てしな

く長い。本屋に届いて買いに行くころには、「ほしい」と言ったことも忘れていた。興味を失っているかもしれない。それを見越して無駄な買い物をしていないよう、母は念には念を入れる。お友達のおうちには教育絵本のセットがあるというのに、私の数少ない持ち物となる絵本は、吟味され抜いたお気に入りだけだ。

内田莉沙子再話、佐藤忠良画のロシアの昔話『ゆきむすめ』（福音館書店）は、そんなふうにして読んでもらった一冊だ。四歳のお誕生日、何かのほずみで調子づいた私は、このお話を大勢の人の前で暗誦して拍手喝采を受けた。字も読めないのに、いつの間にかはじめから終わりまで覚えていたことに母も驚いた。そういう仕方でも深く心に刻まれた作品は、『ゆきむすめ』一作だけだ。ひとりで絵本が楽しめるようになる、もう読んでもらえなかつたから。

『ゆきむすめ』を、私は手放さなかった。小学生になってひらがなが読めるようになって、今度はひとりで絵を眺めた。その絵はエキゾチックなものだった。おじいさんもおばあさんも女の子も、顔かたちや服装や体格が私の周りにいる人とは、かなり違う。町のどこを見回しても、絵本で見るような風景はない。おばあさんは大きな白いスカーフを、おじいさんは見たこともない毛皮の帽子を、こどもたちは色とりどりの帽子をかぶって、みんな大きな長靴をはいている。一面雪野原で、雪だるまを作り、ソリで遊んでいる。そんな雪、見たことない。母も知らない「外国」だという。日本人の画家が、なぜ外国、しかもロシアの絵を描いたのだろうか。

雪に閉ざされた雪原に春がきて、川が流れる。夏が来て、草原に草や花が咲く。女の子たちが遊びに行く森には、太い木が何本もあって、大きな

木の切り株がある。そんな大きな木、見たことない。夏の森の中で、ひととき顔色の白い女の子が、足を冷たい川の流れに浸している。女の子は、どうして最後に消えていなくなるのだろうか。『かぐやひめ』にしたってそうだ。おじいさんとおばあさんがせっかくなにかわいがって育てたというのに、「おんなのこは、おじいさんとおばあさんと、しあわせにくらしました」と終わらないのは、なぜなのだろう。

絵を描いた彫刻家佐藤忠良氏が、第二次世界大戦の敗戦でシベリアに抑留されていたことを知った時、私は四十歳を過ぎていた。あの時三歳のこどもの魂をつかんだのは、本物の芸術の力だった。手元に、大人になって買い戻した『おおきなかぶ』と『ゆきむすめ』がある。いつかこんな絵本をつくる人になりたいという夢を、私はまだ抱き続けている。